

## 桜門体育学会平成 26 年度大会 シンポジウム

### スポーツによる社会貢献の可能性を探る

桐蔭横浜大学 准教授 渋谷 崇行

司 会： 磯貝浩久（九州工業大学）  
演 者： 佐藤国正（桐蔭横浜大学） <参加者の立場から>  
田中宏明（特定非営利活動法人セブンスピリット） <実践者の立場から>  
渋谷崇行（桐蔭横浜大学） <研究者の立場から>  
コメンテーター：松田悠介（特定非営利活動法人 Teach For Japan）

スポーツによる社会貢献は様々なかたちで行われている。スポーツが有する資源をいかに効果的に用いて社会貢献に繋げていくかという視点は、今後ますます重要視されるであろう。このシンポジウムでは、社会貢献の中でも特に国際協力に焦点を当てて、スポーツが有する可能性について考えることを目的として企画された。

スポーツによる国際協力は教育、文化交流、貧困対策、平和等、様々なキーワードの下で実施されてきた。こうした事実からいえることは、スポーツには国際協力に貢献しうる何らかの力があると認められてきたということである。それでは、国際協力に貢献しうるようなスポーツが有する資源とは何であろうか。この問いに答えることは、国際協力の観点からスポーツの意義を検討することでもある。そして、そこから導かれた資源を意図的に実践に応用することによって、スポーツによる国際協力はより効果的に行われるようになるであろう。

一方、体育・スポーツ系の学部で学ぶ学生に目を転じてみると、彼らが専門職として働ける場合は、現状では教員や民間スポーツクラブのインストラクターなどに限られてきた。このことから、体育・スポーツ系学部における専門職養成も、そのような職種を意識して行われることが多かったといえる。しかし、国際協力に果たすスポーツの役割が明確になり、その広がりが今後ますます期待されるのであれば、体育やスポーツの専門家がその分野で活躍することも求められるようになる。それでは、スポーツによる国際協力の実践者に備わるべき能力や資質とはどのようなものなのか。それに準じて、体育・スポーツ系学部における教育内容に変化が生じたり新たなものが加わったりする可能性もある。

さらに、我々研究者が、スポーツによる国際協力がどのように貢献できるのかということについても考えたい。スポーツによる国際協力が効果的に行われるようになるためにはどのような研究が求められるのか。国際協力において、実践に役立つ知識への需要は大きいことが予想される。したがって、我々研究者には実践に役立つ研究を進めていくことがますます

す求められそうである。

以上のような関心から、本シンポジウムでは、主に次の3点について検討することにした。そして、その議論を通して、スポーツによる国際協力の可能性や今後の課題を導きたいと考えた。

- 1) スポーツが行うことのできる国際協力とはどのようなものか、またスポーツには国際協力に貢献しうるどのような資源があるのか。
- 2) スポーツによる国際協力を推進するうえで、その実践者に求められる能力や資質とはどのようなものか。また、専門職養成という点からは、どのような学習や経験が求められるのか。
- 3) スポーツによる国際協力に対して、我々研究者はどのような貢献ができるのか。また、期待される研究テーマとしてどのようなものが考えられるのか。

□「スポーツに秘められたチカラ –参加者の立場から–」 佐藤国正（桐蔭横浜大学）

最初の演者は桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部の佐藤国正先生であった。佐藤先生からは国際協力に貢献し得るスポーツの資源について「スポーツに秘められたチカラ」をテーマに掲げ、青年海外協力隊の経験者の立場から開発途上国でのスポーツの意義や価値について報告があった。以下はその概要である。



スポーツには多くの人を惹きつけ、魅了するチカラがある。こうしたスポーツの利点を有効活用する動きが国内外のあらゆる分野で起こっている。なかでも、国際協力分野では、開発途上国の人づくり、国づくりの為に、スポーツをひとつのファクターとして積極的に取り入れている傾向にある。

我が国における政府開発援助（ODA）を一元的に行う実施機関として開発途上国への国際協力を行なっている JICA では、早期からスポーツの有効性を唱え、長きに亘って実践してきた。教育水準が低いとされる開発途上国では、家庭環境の差異によって青少年の知・徳・体にアンバランスが散見される。青少年を対象としたスポーツ活動では、競技種目のルールやチームの規律に尊厳を抱くことによって養われるモラルへの理解、チームワークを通じて学ぶ協調性への配慮と他者理解、競技力の向上のため計画的にトレーニングに励む継続性の重要性など、実践を通じた情操の教育を可能にしている。スポーツ活動は、心や身体、価値観や世界観、さらに社会を変革させる可能性を秘めている。

□「未来を創る子ども教室 ー実践者の立場からー」 田中宏明 (NPO 法人セブンスピリット)

続いての演者は、NPO 法人セブンスピリットの田中宏明先生であった。田中先生はスポーツが国際協力にいかにか寄与できるかについて、「未来を創る子ども教室」をテーマに掲げ、フィリピンのセブ島で子ども達にスポーツ教育を実践している立場から、経験談を交えてスポーツ教育の有効性を報告していただいた。開発途上国における学校教育、特にスポーツ教育の貧弱さを痛感



して弊団体を設立したわけだが、これまでスポーツに触れてこなかった子ども達がスポーツ教育を通して目覚ましい成長を遂げているのを目の当たりにして、あらためてスポーツの持つ力、そしてスポーツが幼少期における人格形成に非常に効果的であることを感じている。

身体的な成長に効果があるのはもちろんだが、特に効果をもたらすのが精神面である。フィリピンのセブ島では実に 20%近くが貧困層であり、弊団体に通う子ども達の大半はスラムに暮らす、いわゆる貧困地域の子供達である。スラム地域にはモラルやルールといった概念が乏しく、10 歳程度の子ども達でも喫煙はもちろんシンナーをはじめとするドラッグに安易に手を出す傾向にあるが、スポーツに打ち込む子ども達はそういった誘惑に打ち勝ち、ドラッグに手を出す子ども達とは意識にはっきりとした違いが見て取れる。チームスポーツを通して協調性や他者理解、コミュニケーション能力といった、生きていく上で必要なライフスキルを育成する。すなわち、子どもの未来を創る力がスポーツにはある。

□「スポーツによる国際協力 ー研究者の立場からー」 渋谷崇行 (桐蔭横浜大学)

最後は、桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部の渋谷による発表であった。「スポーツによる国際協力」は様々な形で行われている。それらは取り組む問題や課題のタイプ、あるいは活動組織の大きさ等によって差はあるものの、スポーツが有する資源を当該国の問題や課題の解決に適用していくという基本的な考え方は共通している。しかし、その国にスポーツを持ち込みさえすれば、問題や課題が直ちに解決に向かうというわけではない。問題や課題の性質とともに、それらに貢献しうるスポーツの特性を的確に理解することで、「スポーツによる国際協力」は効果的に行われるようになるとい



える。そして、こうした理解を促すための知識を生み出すことが、研究には求められている。

ところで、研究の成果を現場の実践に役立たせたいと考える研究者は多い。しかし、実践の現場からは、研究が役立っていないとの声が聞こえてくることがある。具体的には、実践現場で必要とされる研究が行われていないということや、研究成果が実践で活かせるかたちになっていないという批判がある。ここで「スポーツによる国際協力」における研究の役割に目を転じてみると、当然のことながら、実践に役立つ知識への需要は大きい。そこで、本シンポジウムでは、「どのようにすれば現場の実践に役立つ研究を行うことができるのか」という問いに対する演者なりの考えを、理論と実践、そして研究者と実践者との関係性の観点から論じた。

佐藤先生と田中先生からは、日本においては知ることが難しい開発途上国の課題や子どもの現状についてご紹介いただいた。これらの内容をシンポジウム参加者が少しでも身近に感じることができれば、自らの社会貢献の主体として一步を踏み出せるように感じる。そうした点で、このシンポジウムがこれから生きる学生の意識に変化を与えるきっかけになったのではないかと思いたい。若者の柔軟な発想力を活かして、社会貢献におけるスポーツの可能性をどんどん切り開いてほしいと願っている。

